

神戸女子短期大学 ○ 森下 敏子

目的 阪神大震災により甚大な被害を受けた人々は、被災時に家族として咄嗟にどのように対処したか、人間の集団の最小単位である『家族』のきずなどとは何か。今回の震災は生命を守るための極限の状態に遭遇した場合の『家族』のありかたの原点を問う機会にもなったといえるのではないかと考え、震災後の家族意識の変化を調べた。

方法 被災地に在住する学生200名を対象にアンケート調査を行い、家族意識におよぼす震災の影響について検討した。有効率は88.5%であった。一部、複数回答も可とした。

結果 対象者の居住地は神戸市・明石市・加古川市で64%、西宮・芦屋・尼崎・宝塚市で11%であり、75%が被害の大きい地域に居住していた。被災時に家族全員が一緒にいたのは全体の76%であった。震災直後に最初に連絡をとった人は親戚45%、友人33%、家族17%であり、93%の人が電話で連絡を行っていた。震災時に最初に対象者が呼んだ人は母親40%、父親17%、兄弟15%、祖父母0.6%であり、日頃の母親の影響が瞬時に無意識のうちに現れたものと考えられ、 χ^2 検定の結果、5%有意で差が認められた。震災直後の意識は48%の人が

「何が起こったのか分からなかった」とし、「恐ろしい」と答えた人の18%を上回った。「周囲や家族の安否を気遣った」とした人は24%であり、冷静な対応を行うことが直後は困難なことが示された。直後の対応で最も多かったのは「布団をかぶりじっとしていた」とした人で56%をしめ、家族をかばった人は5%にすぎなかった。震災直後と比較して現在では51%の人が「落ち着いてきた」と答え、72%が「家族の大切さがわかった」「会話が増えた」としている。震災を機に家族のきずなが深まり、意識の高揚につながったと考えられる